

## 虹

に

## ミクロな平和 連なる

## ①86 日本一小さな村の無料の学童保育



学童保育施設に隣接したカフェで仕事する岡山さん

大きなガラス戸をコツンと叩く音がする。黄色い傘を差しながら、小学生の男の子がガラスの向こうから話しかける。「ねえ、雨降ってきたよ」。ガラス張りのカフェの周りにはにぎやかだ。子どもとヤギが遊び、防風林の葉っぱが風に揺れる。

打ち合わせ中の岡山史興さん(39)が庭の子どもたちに視線を向ける。「子どもはいつもこう。仕事中でもお構いなしなですよ」と笑う。

カフェは学童保育施設「fork toyama(フォーク・トヤマ)」と併設されている。築70年ほどの古民家をリフォームしたものだ。2022年に越中舟橋駅のすぐ近くにオープンし、児童約50人が通う。木の温もりを感じさせる空間に、ボール遊びをしたり、鬼ごっこをしたりする声が響く。

施設の特徴は保育料がゼロであること。この運営方式は個人や企業の寄付によるサポーター制度と、カフェの収益によって成り立つ。全国的にも異例な取り組みだ。

岡山さんは会社経営の傍ら、施設を運営する一般社団法人の代表理事を務める。保育や教育の経験があったわけではない。舟橋村の育児支援制度や環境に魅力を感じて東京から移住してきただけだ。他人の子どもの面倒を見るつもりなどみじんもなかった。「でも、教育は大事だと思っていました。それがたまたま学童に結び付いたんです」

自分でも意外だった挑戦の根っこには、平和への思いがある。

◇

長崎で生まれ育った。戦争や平和という言葉は重い意味を持つ土地柄だった。原爆忌の8月9日にはサイレンが鳴り、皆黙とうを捧げる。学校では平和教育が盛んで、被爆体験を未来に継承しようとしていた。

父は高校の国語教師で、平和学習部の顧問だった。一緒に平和集会に行き、被爆者と接したこともある。原爆症で亡くなった祖母の命日は父の誕生日と同じ日付。だから父は自分の誕生日を祝おうとしなかった。

岡山さんは口より先に手が出た父を「大嫌いだ」と言うが、平和について深く考えるようになったのは父の存在があってこそだ。

先輩に誘われ、核廃絶を願う「高校生1万人署名」を始めた。街頭や駅前が高校生で集まった。その活動が認められ、高校生平和大使としてローマ法王に謁見した

り、ジュネーブの国連欧州本部でスピーチするという貴重な機会も経験した。壇上から英語で伝えたのは、誕生日に複雑な思いを持つ父の人生だった。

筑波大学の比較文化学類に進学した。紛争の種にも、平和の礎にもなる宗教について学ぼうと思った。故郷を離れて驚いた。研究学園都市と呼ばれるつくば市では、8月9日だからといってサイレンは鳴らない。同級生に平和活動に打ち込んだことを明かすと、「すごいね」と言われた。その声は距離感と冷めた響きを帯びていた。

大人になって知る現実だった。平和という言葉がかつての学生運動の古いイメージや、政治性に絡め取られているのだ。とはいえ、大義のある活動を続けたかった。

平和という言葉に身を固くする人たちとどう距離を縮めるか。考えたのが「I♥(ラブ)キャンペーン」という運動だ。「I♥」と記されたカードに、家族や友人、



ペット、アイドルなど自分の愛する存在を描いてもらう。平和をスタイリッシュに、人ごとではないものとして意識してもらう狙いだ。それを集めて各地で展示会を開いた。さまざまなメディアで取り上げられた。

◇

大学院修了後は企業のブランディングを手掛ける会社に就職した。理念を伝える方法を学ぶ機会になるとも思った。町工場が作った鍋や、東日本大震災に関連する事業を担当した。職人や被災者と接し、平和への考え方が変わった。茫漠とした「マクロな平和」の理念を守るには、衣食住の充実という「ミクロな平和」を成り立たせる必要があるのだ。経験を積んで29歳で独立した。小さな地域や挑戦をサポートしたいと

考えていた。

自社で運営するウェブメディアの取材のため、舟橋村を訪れた。時代に逆らうように、小さな村の人口が増えている事実を面白く思った。それを支える子育て環境の良さに感心した。公園をクラウドファンディングで整備するという取り組みも新鮮に映った。当時の村長にインタビューした。「学校の統廃合につながり、子どもたちが不便になる」という理由で、市町村合併ブームの中でも独立独歩を貫いたという。

当時息子は3歳。岡山さんは東京に暮らしながら、子育てに限界を感じていた。都会は人があふれ、住環境も悪い。消費する機会が多いが、自分が何かを生み出す余地が少ない。子育てに適した場所と思えなかった。新幹線とネットがあれば会社の経営はどうにかなる。地縁はないが、子どもの目線に立った村で暮らしたくなった。

千葉出身の妻に「移住しよう」と伝える

「犬」草 田部 哲

と、「なんで富山? 1人で行ってよ」と拒絶された。しかし、居酒屋や寿司屋に連れていくと、「富山、ヤバいじゃん」と前のめりになってくれた。

2018年に舟橋村に移住した。東京と富山を行き来しながらの暮らしにはすぐに慣れた。しかし、その3年後に村が学童保育施設の直営をやめる方針を下した。翌年に長男が小学校に入学するタイミングだった。村は施設を公設民営にするというが、それが親として子どもを通わせたいものになるかどうかは不安だった。

学童保育への関心を深めた。ひとり親家庭や共働きの増加、そして子どもの安全への意識から学童保育の需要は全国的に高まっている。舟橋村も同じだ。都会には数万

円払えば、英語やプログラミングを学べる施設がある。その一方で、親の経済状況や家庭環境次第で、通いたくても通えない子どもがいる。放課後に格差がある。

小学生の放課後の時間は年間千時間という。それを誰もいない家でゲームをして過ごすのか。学童保育で過ごすのか。「生まれた環境によって時間の価値や質が変わるなんておかしい」と岡山さんは感じた。子どもを思えば、社会課題が人ごとではなくなった。自分の手で誰でも利用できる学童保育施設をつくらうと思いついた。賛同してくれる個人や企業の「みんな」で支える「みんな」という仕組みを考えついた。「社会は子どもがいないと続かない。それなら子育てのコストをみんなで負担するという考えがもっと深まっていい」

◇

移住当初から気になっていた古民家を借りた。改装費用はクラウドファンディングで捻出した。「fork toyama」という名前には「選択肢」という意味合いを込めた。生き方の選択肢に出会える場所にしようとした。だから建築家や漁師、和菓子職人を招いたワークショップも開く。

平和の願いもほんのりにじませる。「この世界の片隅に」「火垂るの墓」など施設内で児童が楽しむDVDには、命の大切さを考えさせるものを揃えた。声高にメッセージを説明することはないが、「何となく自分で感じ取ってくれたらそれでいい。考える入り口だけ用意するイメージです」。

今年からは施設に行政の補助金も入ることになったが、赤字は続く。岡山さんが経営する会社から手出しすることもある。しかし、前向きだ。「お金は借りられても、子どもたちの時間は借りられませんから」そんな岡山さんを住民たちは応援してくれる。野菜を持ってきてくれたり、草刈りを手伝ってくれたり。振り込みできるのに、月会費の千円を握りしめてやってくるサポーターのお年寄りもいる。子どもの笑顔が見たいのだ。3.47平方キロという日本一小さな村で、ミクロな平和の輪が連なる。

「fork toyama」は明るい光が印象的です。大きなガラス窓のせいでしょう。岡山さんは「保護者が迎えに来た時、子どもたちの様子をひと目で分かるようにしました」と説明します。カフェからも子どもたちの様子が見えます。カフェの利益も運営費用になるので、「みんな」を応援したい方は足を運んでみては。



## 「虹」第8巻 販売中

最新刊の第8巻「虹 誰もいないから両手を広げた」は、北日本新聞連載の141〜160回目までの20話分を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076(445)3352(平日午前9時〜午後5時)。

心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見、ご感想をお寄せください。

〒933-0911 高岡市あわら町13-50

北日本新聞社西部本社「虹」係

FAX 0766-25-7773

mail niji@kitanippon.jp

次回掲載は11月1日(金)です。

紙面提供/人と鉄のあいだに

OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作/北日本新聞社  
メディアビジネス局